

研 究 速 報

栃木県大平町出土舟形木棺中からの蘚類

江 本 義 数

本年5月、栃木県下都賀郡大平町七回り鏡塚から出土した舟形木棺内からの蘚類を入手した。この資料は同塚発掘の際に出向いた当部江本義理主任研究官がもたらした土塊中に発見したもので、同県文化財保存課の大和久震平氏^{1,2)}によると、この木棺は一木造りで、全長、5.49m、巾1.1m、削り抜いた部分は身では長さ3.2m、巾60cm、深さ27cm、その保存状態は良好で、この底に弓、鉾、玉纏太刀などの副葬品が納められ、その上に褥状に繊維状のもの（コケ）が人体の範囲に厚さ約10cm敷かれ、更にその上に遺体が安置されてあったという。この遺物発見の端緒は、この頃の宅地造成でブルドーザーによって、木棺の蓋の1部が破壊されたので、直に作業は中止され、同町教育委員会の活動となり、文化庁を通じて出土品の保存強化のため東京国立文化財研究所保存科学部が作業を進めることになった。

コケの資料は棺内で土とまざり発見時に繊維状のものとして顧られず、しかも水を多分に含んでベタベタの土塊として今回入手した。この僅か少量のコケを含む土塊を除いて、他はブルドーザーで反転捨て去られた。大和久氏の談によると発掘の際、土の中に糸とも違う繊維が多量にあったというが、これがコケの木化した茎の部分であったのである。

資料は先づ静かな流水で処理すること4、5回土を洗い落して見るとまさしく蘚類である。それでこの材料を蘚類専門の東京科学博物館の井上浩博士を煩はし、種の検定を乞うた。同博士は丹念に調査され、初めミズスギモドキ後にハヒヒモゴケの2種をお知らせ下さった。前述のようにこの褥用とした蘚の量は莫大であることは申すまでもなく、それだけの量を何処から採り来たか、また1ヶ所の産地からで充たし得たかなど、誠に興味のあることである。この古墳は6世紀後期と推測されており、当時の状況は知るよしもないが、現在において大平町附近で、これ等の産地として知られているのは、同町から西北方約1kmにある石灰岩からなる出流山^{イヌナ}で蘚は普通は溪谷沿いの森林中で、これ等が樹幹枝から垂れ下る、いわゆる懸垂型のものである。

初めは材料からミズスギが多量に発見されたのであるが*、あの多量のコケが僅かにこの種だけであるとは考えられず、必ず他の種も見出されると信じていたところ、最近に至って（10月22日）更に1種ハヒヒモゴケが加えられた。これ等2種は産地では共に混じて生育しており、この資料でも自然におけると同様にその大部分が前者で、後者は非常に僅少含まれていたに過ぎなかった。まだ泥、土塊の資料があればと井上博士とも実に残念であると話したことである。何分にも現場の状況では、貴重なものも無残にも捨てられたのは取り返しのつかぬことである。

発見された蘚類の日本の産地及び分布を次に示す。

1. ミズスギモドキ（イタチゴケ亜族）*Aerobryopsis subdivergens* (Broth.) Brotherus
これまでに知られた本種の産地は、野口彰博士³⁾によると、関東：安房（清澄山）；近畿：

* 関野所長大和久氏その他に、この種名を9月3日に述べておいた。

伊勢（菟野山），紀伊（那智山），播磨（亀ノ山）；中国：安芸（水内村，宮島），長門（長門峡）；四国：伊予（面河峡），土佐（朴ノ川山，虚空蔵山，伊尾木，吾桑村，上分村，杉村）；九州：肥前（多良山），肥後（西ノ瀬，入吉市，市房山，矢岳），豊前（深耶馬溪），日向（東岳，青井岳，柳岳，酒谷村，中郷村），大隅（田代村），尾久島。

分布：台湾，支那，印度支那。

2. ハビヒモゴケ（イタチゴケ亜族）*Meteorium helminthoclaeus* (C. Mueller) Fleischer
野口彰博士の産地記録⁴⁾には，関東：常陸（筑波山）；中部：三河（鳳萊寺山）；近畿：伊勢（朝熊山），紀伊（高野山，泊村）；中国：安芸（広村，呉市，宮島）；四国：伊予（天神村），土佐（魚梁瀬山，虚空蔵山，桑田山）；九州：豊前（耶馬溪，英彦山），豊後（本宮山），肥後（市房山，白髪山，矢岳，入吉市），日向（青井岳村，鰐塚山，柳岳，酒谷村，北郷村，中郷村），大隅（辺塚），屋久島。

分布：台湾，支那，フィリッピン。

これまで古代において，コケは装身具，枕等のつめものとして利用されたといわれているが，その記録は明かでないようで，唯正倉院，法隆寺の古代裂などの塵粉を集めて保管してあった壘を東京国立博物館内で山辺知行氏が発見，その内から野口彰博士がコケを鑑定して蘚類4種，すなわちミズスギモドキ，サイコクサガリゴケ，トサノサガリゴケ，セイナンヒラゴケをあげ，その内でも「ミズスギモドキが大多数を占めており，他は断片にすぎない」と報ぜられたのが最初のものである^{5,6)}。この資料は乾燥状態の塵で，古代裂に混じた雑然としたもの，従ってその用途等は記録がなく全く不明で，朝比奈泰彦博士も「おそらく1000年前後を経過したものらしい」と附記されている。然るに今回の鏡塚の場合は6世紀後期と大体の時代，その用途，その上に現在に至る長期間にもかかわらず，写真（Fig. 1～3）が示すように腐朽，破損もされず，殊にミズスギモドキの如きはその特徴である葉の各細胞の細胞膜が肥厚した円形の突起が明かであるなど，殆ど完全な状態で発見されたことは，実に稀有のことで誠に驚異に値すると信ずる。これは考古学上からも甚だ貴重な事実であろう。

この頃貴重な遺跡が壊滅される報が頻々と伝えられるのは誠に遺憾であるが，今後遺跡発掘に際しては，今回の事実を契機として，貴重な資料を1物たりとも無雑作に，おろそかにされぬよう願ってやまない。ここに蘚類の検定，種々御注意下さった井上浩博士，また日本考古学協会秋大会研究発表レジメをお贈り下さった内藤政恒氏の御好意を深謝して擱筆する。

文 献

- 1) 大和久震平：七回り鏡塚とその出土遺物，月刊文化財 12, 20, Ⅸ, 1969.
- 2) 大和久震平：七回り鏡塚出土の木棺と出土遺物，昭和44年度日本考古学協会秋大会研究発表レジメ p. 7, 1969.
- 3) 野口 彰：日本，琉球，台湾産イタチゴケ亜族及びメリンスゴケ亜族の研究（其二）服部植物研究所報告 6(3)：67, 1948. [ミズスギモドキ]。
- 4) 野口 彰：同上 6(3)：61, 1948. [ハビヒモゴケ]。
- 5) 野口 彰：古代裂に混在した蘚類 [附記朝比奈泰彦]，植研 27(12)：361, 1952.
- 6) 山辺知行：正倉院，法隆寺の古裂の塵粉から蘚類を拾う，古文化財之科学 5, 15, 1953.

生物研究室



Fig. 1 ミズスギモドキ(一部) A part of *A. subdivergens*. 約×24

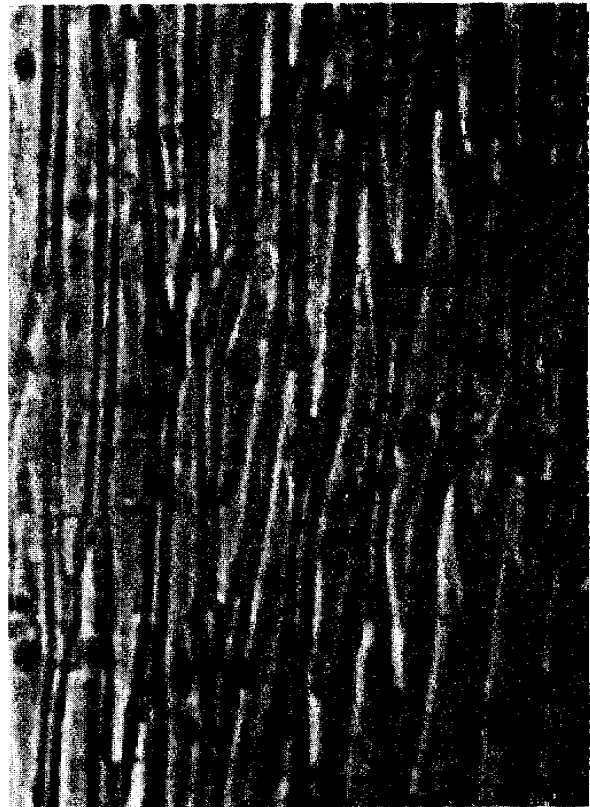


Fig. 2 同上, 葉の細胞における細胞膜の円形突起 ×750 The same, cell of leaf.



Fig. 3 ハヒヒモゴケ(一部) 約×24
A part of *M. helminthocladus*

Résumé

Yoshikadzu EMOTO: Hepatics found in the ancient wooden coffin from Ōhiramachi, Tochigi Prefecture

Two hepatics, *Aerobryopsis subdivergens* and *Meteorium helminthocladus*, were found in an ancient wooden coffin, 5.4 m. long and 1.1 m. wide, which is judged to date from the late 6th century. The hepatics had spread like a cushion about 10 cm. thick, on which the human body lay. It is very exceptional that the plants should have remained in good condition, without decay or destruction, after such a long period. (Figs. 1~3)

Biological Laboratory